住民主体のまちづくりに関する調査研究

2019 年３月

戸田市

目　　次

第１章　はじめに 1
1.1　背景 1
1.2　目的 1
1.3　方法 2
1.4　本報告書の概要 3
第２章　戸田市の現状 4
2.1　はじめに 4
2.2　第１回共同研究準備会 4
2.3　第２回共同研究準備会 6
2.4　第３回共同研究準備会 9
2.5　戸田市の現状について 10
第３章　他市における先進的な取組事例について 11
3.1　水辺空間の活用によるまちづくり事例 11
3.2　空き倉庫の活用によるまちづくり事例 20
3.3　市民協働によるまちづくり事例 24
第４章　市民アンケート 27
4.1　アンケートの目的 27
4.2　アンケートの概要 27
4.3　アンケートの結果（抜粋） 27
第５章　実証実験 32
5.1　実証実験の実施に至る経緯 32
5.2　実証実験当日 32
5.3　高台広場でのイベント 33
5.4　ボートコースでのイベント 33
5.5　当日の様子 35
5.6　来場者へのアンケート 42
5.7　学生アンケート 47
5.8　出店者アンケート 50
第６章　提言 51
6.1　提言３本の柱 51
6.2　「推進体制」の整備 53
6.3　人を呼び込む魅力的な「イベント」 54
6.4　話題性のある情報を「拠点」 58

第１章　はじめに

1.1　背景

戸田市は、関東大都市圏のなかにあって人口増加率の高い都市である。1985 年に埼京線が開通したことが大きく影響し、都心への交通アクセスの利便性や快適性が向上したことにより、人口増加が続きている。それらを裏付けるように、埼京線開通から現在までに約６万人の人口が増加している。戸田市は、こうした利便性と快適性が相俟って人口減少社会においても「選ばれる自治体」として発展しており、今後もしばらく人口増加が続くことが予想されている[1]。

その一方で、年間１万人が転入し９千人が転出するといった人口流動の激しさが戸田市の人口動態の特徴であり、新住民は町会・自治会等の地縁型住民自治組織への加入意欲や帰属意識が低い傾向にある。その結果、地域コミュニティが衰退しつつあるといった問題も生じている。さらに、25 歳から 39 歳の年齢階層の約６割が居住期間５年未満という調査結果[2]も出ているため、この階層の転出抑制に向け、いかに定住化を促し、まちへの愛着を持ってもらうかが喫緊の課題となっている。

このような中、住民が主体となって企画・運営を行う祭りの開催や、若い経営者による空き倉庫を活用した新たな事業が開始されるなど、新たなスタイルのまちづくりが市内で胎動・発芽しつつある。これらは旧来の型にはまらない、目新しさやおしゃれでシンプルな作り込みがなされており、特に若者の心を誘い寄せる魅力や仕掛けによって支持を得ている。

また、地方分権や人口減少等による都市間競争を背景に、シビックプライド[3]の概念が注目されている。これからのまちづくりには、住民の自発的な参画・参加が不可欠である。一人一人が参加することによって当事者意識を伴う自負心が生まれ、自負心を持った者同士が集まることで、個が団となり新たなネットワークやコミュニティが形成されていくのではないかと考えられる。

そこで、「おしゃれ」「シビックプライド」「住民参加」をキーワードとして捉え、まちの魅力を向上・創出させるために調査研究に取り組むことが求められる。

1.2　目的

本研究は、戸田市をフィールドとして調査を実施し、以下の３点を明らかにすることが目的である。

（１）「おしゃれ」なまちを目指した魅力ある環境

---

[1] 国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成 30（2018）年推計）」より。
[2] 戸田市人口移動実態調査（2011 年）より。
[3] シビックプライド研究会によると、シビックプライドは「自分自身が関わって地域を良くしていこうとする、当事者意識に基づく自負心」とされる。

20～40 代の戸田市民のライフスタイルについて調査することで、戸田市流のおしゃれを定義し、それがまちづくりに与える影響や効果を考察する。

（２）「シビックプライド」を醸成するための論点や課題

単なる郷土愛ではなく、当事者意識の形成や自負心を芽生えさせるためにはどういった要素が必要になるのか、それらを醸成させるためにはどのような方法や課題があるのかを整理する。

（３）まちづくりにおける「住民参加」の手法や行政の役割

住民が主体となってまちづくりに参加するために必要な条件や要素を検証するとともに、サポート役としての行政の関わり方を検討する。

1.3　方法

本研究は、2017 年度から２年間にわたり実施した、公益財団法人日本都市センターとの共同研究が基になっている。同共同研究では、都市計画や景観まちづくり、マーケティングやプロモーションなどの専門家を委員とする「住民がつくるおしゃれなまち研究会（以下、「共同研究会」という。)」を設置し、外部の視点から戸田市のおしゃれについて研究している。

その際に、政策研究所は庁内体制としてプロジェクトチーム（以下、「PT」という。）を結成した。PT メンバーは、以下のとおり各種調査研究を進めた。

①共同研究会及び準備会への参加

2017 年度から 2018 年度にわたり開催された共同研究会と、それに先駆けて３回開催した準備会への参加を通じて、戸田市の現状把握や共同研究会委員の知見などを整理する。

②文献調査・現地調査

文献調査や共同研究会で実施した先進自治体への現地調査報告などから、戸田市の特徴である水辺空間や倉庫の活用法、まちづくりにおける住民参加の進め方とそれに関わる行政の役割について調査する。

③アンケート調査分析

2017 年度に共同研究会において実施した、20 代から 40 代までの戸田市民 3,000 人を対象としたアンケート調査である「ライフスタイルに関する調査」の結果を分析することで、住民のライフスタイルや行動様式、お気に入りの場所等を把握する。

④実証実験

戸田市の代表的な水辺空間である戸田公園（戸田ボートコースや高台広場）を中心に、住民主導によるイベント（実証実験）を実施する。ここでの来場者アンケート調査等により、住民と水辺空間とのつながりの創出や、その空間を使い方、遊びのデザイン、戸田市への共感を高める効果を検証する。

⑤ＰＴメンバーによる議論

上記①から④を検証するため、適宜 PT メンバーによる会議・打合せを実施し、研究

目的の達成に向けて「住民主体のまちづくり」について検討し、調査結果をまとめる。

1.4　本報告書の概要

本報告書は、第１章から第６章で構成する。

第２章では、2017 年度に実施した全 3 回の準備会を整理しつつ、戸田市の状況についてまとめる。

第３章では、水辺のまちづくり、住民が主導するまちづくり、倉庫を活用事例等の先進的な取組を実施している自治体を紹介する。

第４章では、「住民がつくるおしゃれなまち研究会」が 2017 年度に実施した市民向けアンケート調査について、その結果をまとめることにより、住民のライフスタイルやお気に入りの場所、まちへの愛着などを明らかにする。

第５章では、実証実験として実施した「水辺で遊ぼう　くらふとカーニバル」について、イベントやボート競技の実施主体についてまとめるとともに、各イベント開催当日の様子、来場者等へのアンケートにより住民の直接的な意見を集約し、整理する。

第６章では、前章までの研究結果を踏まえ、今後の戸田市のまちづくりの在り方の方向性を提示する。

参考文献

・泉 英明、嘉名 光市、武田 重昭（編著）『都市を変える水辺アクション　実践ガイド』学芸出版社、2015 年
・彩の国さいたま人づくり広域連合「公共空間の利活用による地域活性化プロジェクト～官民連携で多様な「場」をつくるには～」、2018 年
・シビックプライド研究会（編著）『シビックプライド―都市のコミュニケーションをデザインする』宣伝会議、2008 年
・シビックプライド研究会（編著）『シビックプライド２【国内編】―都市と市民のかかわりをデザインする』宣伝会議、2015 年

第２章　戸田市の現状

2.1　はじめに

本研究のキーワードである「おしゃれ」「シビックプライド」「住民参加」の３点について戸田市の現状を把握するため、共同研究会発足に先立ち 2017 年度にＰＴ（プロジェクトチーム）を立ち上げ全３回の準備会を実施した。

2.2　第１回共同研究準備会（2017 年 4 月 27 日（木）14：00～16：00 開催）

第１回準備会では、戸田市における「おしゃれ」や「シビックプライド」を把握するため、ワークショップ形式により「おしゃれな場所」「シビックプライドのある場所」を抽出し、その場所を「選んだ理由」を整理した。

（１）おしゃれな場所の抽出

まず、おしゃれな場所とその理由を出し合い、戸田市におけるおしゃれな場所を把握するとともに、まちづくりにおけるおしゃれと感じる理由を洗い出した。図表 2.1 のとおり、おしゃれな場所としては市役所南通りやこどもの国などが挙げられた。特に緑が多いなど自然との調和が取れた施設や場所が挙げられた。

図表 2-1：おしゃれな場所の抽出

おしゃれな場所	理　由
市役所南通り	並木
	夜間照明
	店先の緑
	歩行者用道路スペースが広く設けられている。
	イルミネーション
こどもの国	外観がおしゃれで親子が沢山いて賑わっている。
	緑の丘
戸田公園駅前	駅前がきれい
北戸田駅前	埼京線の線路が高く意外性がある。
ボートコース周辺	艇庫のユニークな屋根並み
	落ち着いた雰囲気
	散策できるよう整備されていてきれい。
笹目川沿い	川沿いが整備されていて散策ができるようになっている。
	桜がきれい。
芦原小学校	シンボリックだが馴染んでいる。
	洗練された白

あいパル	木質感
	光の演出
	外観がおしゃれで市民も多く利用している。
アリスの広場	楽しい道づくり（水辺・温かみのある歩道）
	沿道の家の顔
彩湖・道満グリーンパーク	緑が多い。
	水辺の環境がある。
ロットのお店	一店ごとにコンセプトの違う店舗づくり
川岸倉庫	外見は倉庫であるが内部はおしゃれ（デザイン性）
	ギャップ

（２）シビックプライドのある場所の抽出

次に、シビックプライドのある場所を抽出するため、「シビックプライド」の概念を整理した。シビックプライドとは「日本語の郷土愛とは異なり、自分自身が街を構成する一員であるという自覚や、街をよりよい場所にするための取り組みにかかわろうとする当事者意識に基づく自負心」として定義される。そこで、具体的にシビックプライドを感じるための条件を挙げ、その条件にあった場所や取り組みを選定した。挙げられた意見については、図表 2-2 のとおりである。

図表 2-2：シビックプライドのある場所、取り組みの抽出

シビックプライドを感じる条件	場所、取り組み	シビックプライドを感じる条件	場所、取り組み
人が集まる建物	こどもの国	イベント	花火大会
	公園（ちびっこプール）		ボート競技大会
	あいパル		マラソン大会
	おしゃれなカフェ	教育	教育が充実
人に勧めたい場所・イベント	ボートコース		スポーツが盛んなまち
	花火大会	空間	ボートコース
	ふるさと祭り		水辺が多い
自慢の制度	三軒協定	生活	水道代の安さ
	子育て支援の充実		利便性
住環境	駅前がマンション		街がコンパクト
	公園が多い		坂道が無い
	公園のプール		災害が少ない

2.3　第２回共同研究準備会（2017 年 5 月 26 日（金）14：00～16：30 開催）

第２回準備会では、前回出された意見の中で、おしゃれな場所として意見が多かった９カ所を選定し、それぞれの場所について①おしゃれな理由、②シビックプライドを感じる理由、③おしゃれでない部分があればその理由と改善点を整理した。また、「おしゃれ」と「シビックプライド」が戸田市の施設等においてどのような関係性が築かれているのかを探り、施設ごとに位置づけを整理した。おしゃれな場所として選定された９ヶ所については、図表 2-3 及び 2-4 のとおりである。

図表 2-3：戸田市におけるおしゃな場所

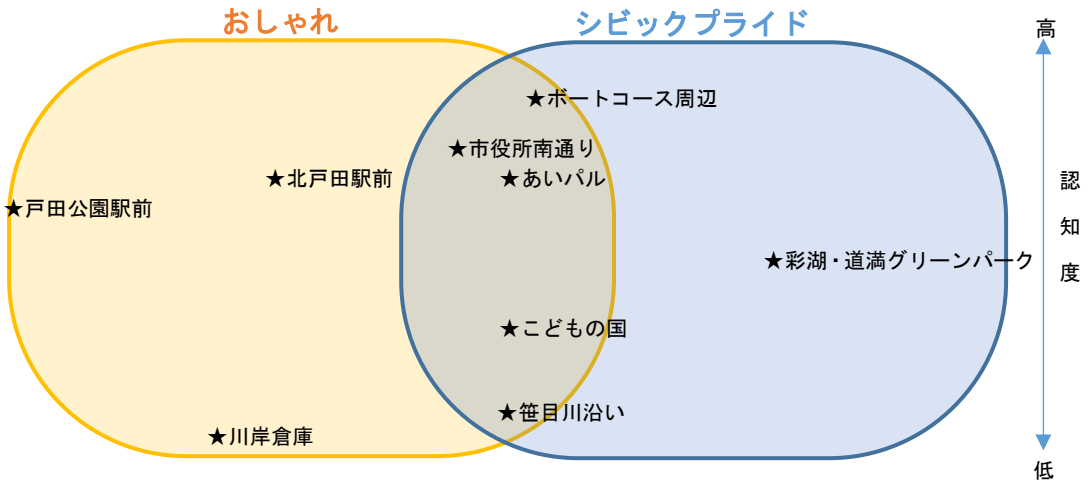
市役所南通り	**あいパル（上戸田地域交流センター）**
○おしゃれな理由	○おしゃれな理由
・開放的な店（ガラス張りの店、オープンカフェ） ・後谷公園や並木に緑が豊富で季節感を感じられる。 ・統一感がある。（ストリートファニチャー等） ・ほっこりする木の看板やオール等、個性的である。	・明るくてきれい。 ・良い意味で公共施設らしくない。 ・洗練された雰囲気。 ・気軽に立ち寄れる。（本、カフェ等）
○シビックプライドを感じる理由	○シビックプライドを感じる理由
・友人と行きたいカフェがある。 ・地元住民が花壇を手入れしている。 ・ゆめまつりや音楽コンサートの開催	・図書館や公民館など色々な機能がある。 ・幅広い年代が集まる場所となっている。 ・色々なイベントを開催している。 ・建て替えに際し、市民会議を開催することで、市民も参加している。
○対象となる世代	○対象となる世代
全世代（特に 30～40 代女性が多い。）	子供～お年寄りまで幅広い世代
○改善点	○改善点
・駐車場の周辺が単調になりがちなので、緑の工夫が必要である。 ・駐輪できるスペースが店先に無い。 ・となりの店同士つなぐイベントの開催が少ない。 ・所々に座れる場所があるとよい。	・利用者が上戸田地区の住民に限定されている。

こどもの国	戸田公園駅前
○おしゃれな理由	○おしゃれな理由
・建物と周辺が調和している。 ・再整備による新しい施設である。 ・利用者が参加できるイベントが多い。 ・雨天でも室内で遊ぶことができる。 ・交通の便が良い。 ・冬はイルミネーションが綺麗。	・新しい店舗が増えている。（西口） ・比較的緑が多い。（西口）
○シビックプライドを感じる理由	○シビックプライドを感じる理由
・歴史のある公共施設として愛着がある。 ・ターゲット層が利用しやすい施設となっている。 ・自分の家の庭のような雰囲気があり、親しまれている。	・ボートコースに近い駅。 ・「公園駅」という名称が緑や自然をイメージさせる。
○対象となる世代	○対象となる世代
子供とその保護者	駅前の利用者は全世代。店舗利用者は 10～40 代
○改善点	○改善点
・駐輪場に屋根が無く、雨天時に利用しづらい。 ・無料駐車場が少ない。	・東口の駅前空間が狭く整備されていない。 ・市外から電車で来た人々に対し、戸田市の特徴である水辺を感じさせる空間やイメージ等のアピールが弱い。 ・「公園駅」という名称から感じる雰囲気が無い。
北戸田駅前	**ボートコース周辺（戸田公園）**
○おしゃれな理由	○おしゃれな理由
・駅前に新しいタワーマンション ・整備された駅前（東口） ・綺麗な外観の小学校（芦原小学校） ・駅周辺のバーやカフェ ・駅周辺にある住宅街を利用したきれいな店舗	・日本で唯一の人工静水コースである。 ・1964 年の東京オリンピックの舞台となった。 ・大学や実業団チームの艇庫が並んでおり、独自の場所となっている。 ・水辺を活用した公園整備
○シビックプライドを感じる理由	○シビックプライドを感じる理由
・これから発展していくという可能性が感じられる。 ・北戸田駅のホームの高さが日本一	・一本道のボートコースで開放感があり、景観が美しい。 ・スポーツが盛んであることをアピールできる。 ・ジョギングや犬の散歩で市民が集まっている。
○対象となる世代	○対象となる世代
20～30 代	10～20 代、50～60 代
○改善点	○改善点
・駅の高架下の空間活用 ・駅前でのイベント開催	・子育て世代が少ない。 ・水質の浄化 ・聖火台をアピールする。

彩湖・道満グリーンパーク	笹目川沿い
○おしゃれな理由	○おしゃれな理由
・多様なスポーツが楽しめる。 ・景色がきれい。（春に桜が咲く。） ・開放的であり、気持ちが良い。	・水辺に近づける。 ・プロムナードが整備されている。 ・演奏会や舟下り等のイベント
○シビックプライドを感じる理由	○シビックプライドを感じる理由
・余暇を過ごすことができ、リフレッシュできる。 ・水と緑がある。	・古くからの水辺スポットであり、今後再生プロジェクトで整備が進む等将来性がある。
○対象となる世代	○対象となる世代
全世代	20～40 代（子育て世代）
○改善点	○改善点
・アクセスが悪い。 ・バスの停留所が遠い。 ・バーベキュー場のごみ問題。 ・常設の店が少ない。	・水辺までの距離が遠い。 ・落ち着いて滞在できる場所が少ないので店（カフェ）等が必要である。 ・整備途中であり、未完成な部分が多い。 ・水質改善が必要。

川岸倉庫
○おしゃれな理由
・倉庫のリノベーションという発想がおしゃれ。 ・専門家が設計しており、機能性にも優れている。 ・デザインがおしゃれ。（外観は倉庫だが、内装が凝っている。 ・イベントが開催できる。
○シビックプライドを感じる理由
・まちにおしゃれな倉庫があり自慢できる。 ・イベントを通じた市民交流がある。 ・利用者が地元で起業しているため、将来有名な企業が輩出されれば地域の好感度や知名度がアップする。
○対象となる世代
30～40 代（起業者の推定年齢）
○改善点
・市民の知名度が低いため、周知が必要。 ・常時、人が集まるよう物販等を行うのはどうか。

図表 2-4：「おしゃれな場所」と「シビックプライドのある場所」の関係性



2.4　第３回共同研究準備会（2017 年 6 月 26 日（月）14：00～16：00 開催）

第３回準備会では、前回までに整理したおしゃれな場所以外に、シビックプライドのある場所として、外観的、空間的な要素だけではなく、市民自身がその空間をつくり、イベント等に参加することでシビックプライドが生まれてくるという考え方をもとに、戸田市内において開催されているイベントについて整理した。挙げられた内容については図表 2-5 のとおりである。

図表 2-5：戸田市のイベント

彩湖・道満グリーンパーク	・パークらんマラソン ・親子金魚つり大会 ・テレ玉親子ふれあいマラソン ・へら鮒つり大会（春季）（秋季） ・戸田ヶ原さくらそう祭り ・フルマラソン＆ウルトラマラソン ・ベジタブルマラソン in 彩湖（春）（秋） ・道満さんま祭り ・戸田マラソン in 彩湖 ・彩の国マラソン
笹目川	・プリムの春祭り、ハロウィン、クリスマス ・美笹商店会さくら祭り、秋祭り ・コンサート ・笹目川夏フェスタ ・コンパル祭り

市役所	・消防出初式 ・あいパルフェスタ ・朝市 ・植木市「花フェスタ」 ・後谷公園まちかど広場コンサート ・キャンドルナイト in とだ ・アートむすび市 in 戸田 ・ママフェス ・上戸田ゆめまつり ・商工祭 ・戸田収穫祭
ボートコース	・全日本軽量級選手権大会 ・全日本マスターズレガッタ ・戸田橋花火大会 ・全日本大学選手権大会 ・戸田ふるさとまつり ・オックスフォード盾レガッタ ・全日本選手権大会 ・全日本新人選手権大会
戸田公園駅	・こどもの国まつり ・こどもの国地域イルミネーション点灯
戸田駅	・さくらパル祭り ・健康福祉まつり

2.5　戸田市の現状について

全３回の準備会を通じ、戸田市におけるおしゃれな場所、シビックプライドのある場所をまとめた。結果、「水辺」「緑（公園）」に係る場所がおしゃれであり、シビックプライドを感じられる場所であるとともに、場所の外観的、空間的な要素だけではなく、市民自身がその場所を活用し、イベント等を催すことで、よりシビックプライドを感じられる場所をつくり上げていることがわかった。

第３章　他市における先進的な取組事例について

3.1　水辺空間の活用によるまちづくり事例

戸田市は、戸田公園（戸田ボートコース、高台広場）や彩湖・道満グリーンパークをはじめとする多くの水辺空間を有している。これらの水辺空間を貴重な地域資源として活用するにあたり参考となる、魅力ある水辺空間の創出に成功した３市のまちづくり事例を紹介する。

（１）大阪市「水都大阪」

①事業の経緯

大阪市では、2001 年に「水都大阪の再生」が国の都市再生プロジェクトに選定されたことを契機に、2002 年に大阪府、大阪市、経済界等が構成する「花と緑・光と水懇話会」と「水の都大阪再生協議会」の２つの組織が設立され、親水空間の整備や賑わいづくりなど「水都大阪の再生」に向けた様々な水辺の拠点整備が展開された。

水辺の拠点整備が進められるなか、「水都大阪の再生」の一環として、2009 年「水都大阪 2009」が開催された。親水性の高い中之島公園や水の回廊を中心とした市内各所において、アート舟の巡航や橋梁ライトアップ、船着場での朝市、舟と水辺を組み込んだ街あるきなど水辺の楽しさを再発見できる様々なプログラムが展開された。

2010 年には、「水都大阪 2009」で培ったノウハウや新たに育まれたネットワーク及び、これまで「花と緑・光と水懇話会」と「水の都大阪再生協議会」により進められてきた「水都大阪の再生」に向けた取り組みを継続させるために、大阪府、大阪市、経済団体等で構成した「水と光のまちづくり推進会議」が設立された。

同推進会議は、水都大阪の魅力向上と賑わい創出のためのソフト・ハードのトータルのまちづくりを担うとともに、2011 年８月に「水都大阪水と光のまちづくり構想」の策定（構想策定：2011 年～2020 年）により、水と光のまちづくりのさらなる推進に向け取り組んでいる。

図表 3-1：「水都大阪の再生」に向けた取り組みの経緯

2001 年 12 月	都市再生プロジェクトに選定
2002 年９月	「水の都大阪再生協議会」設立
2002 年 10 月	「花と緑・光と水懇話会」設立
2003 年３月	「水の都大阪再生構想」策定（水の都大阪再生協議会）
2003 年３月	「大阪花と緑・光と水まちづくり」提言（花と緑・光と水懇話会）
2007 年５月	「水都大阪 2009 実行委員会」設立
2009 年８月～	「水都大阪 2009」開催
2010 年４月	「水と光のまちづくり推進委員会」設立
2011 年　８月	「水都大阪水と光のまちづくり構想」策定

②事業の概要

2004 年３月に国交省から通達された「都市及び地域の再生等のために利用する施設に係る河川敷地占用許可準則の特例措置」により、一定条件の下、占用主体や施設が一部拡大され、河川区域における社会実験として店舗やイベントの実施が可能となった。

これをうけ 2008 年には、中之島を中心に、堂島川、土佐堀川の他、安治川、大川の一部が特例措置の適用区域として指定され、川床を設置した北浜テラス、川の駅はちけんや、中之島バンクスにおける店舗営業など、創意工夫あふれる民間事業が河川区域において展開された。

このような動きのなか、2011 年３月、河川敷地占用許可準則が改正され、河川管理者が「都市・地域再生等利用区域」を指定することにより、河川区域での営業活動が可能となった。すでに民間による社会実験が実施されていた区域は順次、都市・地域再生等利用区域に指定され、大阪の水辺にさらなる賑わいを創出している。

図表 3-2：都市・地域再生等利用区域の指定エリア

出典：水都大阪ホームページ

https://www.suito-osaka.jp/history/history_11.html

2011 年７月　【大阪府】八軒家浜（大川）

2012 年３月　【大阪府】中之島東部、北浜テラス、中之島バンクス（堂島川・土佐堀川）

2012 年４月　【大阪市】道頓堀川

2012 年７月　【大阪府】若松浜（堂島川）

※【　】内は河川管理者

写真 3-1：中之島東部エリア

出典：水都大阪ホームページ https://www.suito-osaka.jp/gallery/index.html

写真 3-2：道頓堀エリア

出典：水都大阪ホームページ https://www.suito-osaka.jp/gallery/index.html

（２）広島市「水の都ひろしま」

①事業の経緯

広島市では、「水の都ひろしま」の実現に向け、平成２年に国、県、市とで連携して「水の都整備構想」を策定し、親水性の高い護岸整備、豊かな河岸緑地、デザイン性の高い橋梁の整備を行った。その後、「水の都整備構想」により整備された河川緑地や水辺の積極的な利用を促進するために、市民と行政の協働による「水の都ひろしま構想」

が 2003 年１月に策定され、同年 10 月には「水の都ひろしま」推進計画が策定された。こうした取り組みの中で、2002 年７月に国の都市再生プロジェクトとして、「水の都の再生」が選定された。また、2004 年３月には国交省から「都市及び地域の再生等のために利用する施設に係る河川敷地占用許可準則の特例措置」が通達され、河川区域内において、従前は認められなかった新たな専用施設の設置や民間事業者等による営業活動が、一定の条件の下、実施可能となった。また、同時期に京橋川右岸地区及び旧太田川・元安川地区の一部が「河川利用の特例措置を適用する区域」として指定を受けた。これを大きな推進力とし、水辺空間における市民の自由で多様な利活用を促進するため、特例措置適用区域である京橋川右岸地区と旧大田川の元安川地区をモデル地区に位置付け、社会実験として「水辺のオープンカフェ」事業が実施された。

図表 3-3：広島市における水の都再生に向けた取り組みの経緯

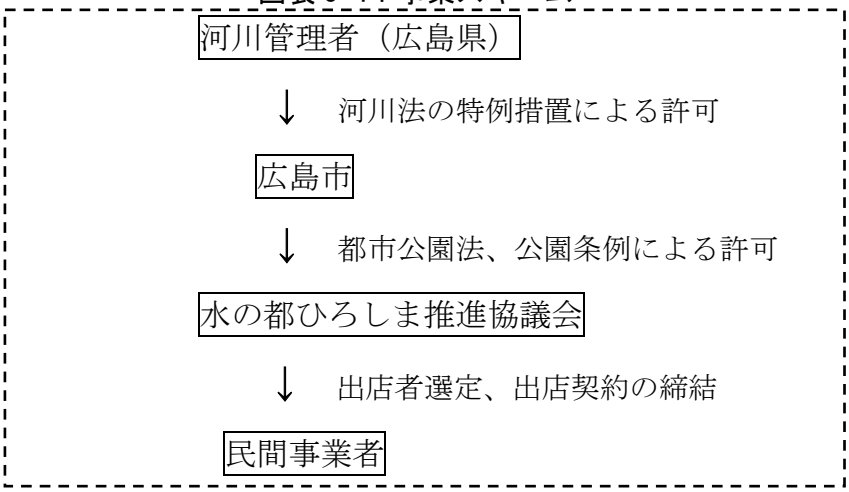
1990 年３月	「水の都整備構想」策定
2002 年７月	都市再生プロジェクトに選定
2002 年 10 月	「水の都ひろしま推進協議会」設立
2003 年１月	「水の都ひろしま構想」策定
2003 年 10 月	「水の都ひろしま推進計画」策定
2004 年３月	国交省が「河川利用の特例措置を適用する区域」として 京橋川右岸地区および旧太田川・元安川地区を指定
2004 年７月	京橋川オープンカフェ（地先利用型）開業
2004 年 10 月	京橋川オープンカフェ（独立店舗型）開業
2008 年８月	元安川オープンカフェ開業

②事業の仕組み

水辺のオープンカフェ事業では、河川法、都市公園法による許認可手続き、出店者の選定や契約手続き、地元との連絡調整等が必要となることから、市民、経済・観光関係者、学識経験者、行政（国・県・市）で構成した「水の都ひろしま推進協議会」を設立し、推進協議会が中心となり、許認可や契約、調整、誘導を行っている。

事業スキームとしては、河川法の特例措置にもとづく占用許可は、国及び県から広島市が受け、都市公園法による占用許可や公園条例にもとづく使用許可は、広島市から推進協議会が受ける。推進協議会は地元と調整しながら出店条件を決め、公募を行い、出店者を選定、契約する。出店者に対して清掃等の緑地管理を義務づけるなどの地域貢献を行わせる一方で、推進協議会は出店者から受け取る事業協賛金を活用し、地元と連携を図りながら水辺の環境整備を行っている。

図表 3-4：事業スキーム



③事業の概要

水辺のオープンカフェ事業では、河岸緑地を民間に開放しオープンカフェとして活用することで、水辺における賑わいや都心の回遊性を創出されることが意図されている。

また、同事業を契機に、これまでつながりが希薄であった水辺と市街地の一体化が促されることもねらいのひとつとなっている。オープンカフェは「地先利用型」と「独立店舗型」の２通りの形態で実施されている。

・地先利用型オープンカフェ

京橋右岸では、2000 年から地元町内会が主体となって結成した「まちづくり委員会」により、まちづくり活動の一環として、オープンカフェ事業が行われていた。水辺の河岸緑地と市街地が直接接する地形的特長を生かし、民有地の地先にある河岸緑地を利用した「地先利用型」のオープンカフェとして、河岸緑地に隣接するホテル２社に運営を委託し、収益は同委員会の活動費に還元する非営利事業であった。2004 年７月からは、同年３月に設けられた河川利用の特例措置を活用した新たな枠組みとして、民間の営利事業としてのオープンカフェ事業が開始された。これにより当初より参加していたホテル２社に加え、2005 年３月と 2007 年９月からそれぞれ１社が参加し、現在４社が地先を利用したオープンカフェ事業を営業している。

・独立店舗型オープンカフェ

広島市では、地先利用型オープンカフェ事業と並行して、河岸緑地に独立店舗型オープンカフェ（厨房やトイレ等の施設が民有地内にある地先利用型に対し、施設そのものを河岸緑地内に設置し営業する）を設置するための検討を開始した。市内の飲食店等団体にヒアリングを実施し、公募を行った場合の意向調査をするとともに、出店条件設定を検討し、2005 年３月には推進協議会に「京橋川水辺オープンカフェ出店者選定委員会」を設置し、審査手順や選定基準を検討し、同年６月に 19 件の応募の中から４店舗を決定、同年 10 月から独立店舗型オープンカフェを開業した。

また、元安川地区においても、従来から設置されていた仮設型店舗によるテイクアウト方式のカフェから常設の独立店舗型カフェへの移行を決定し、2007 年 11 月に 6 件の応募の中から 1 店舗を決定し、2008 年 8 月から独立店舗型オープンカフェを開業した。

写真 3-3：地先利用型オープンカフェ

出典：広島市ホームページ

http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1111583774214/simple/170825151124_2.jpg

写真 3-4：独立店舗型オープンカフェ

出典：広島市ホームページ

http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1111583774214/simple/170928114703_0.jpg

④その他の取り組み

オープンカフェ事業の他にも、河岸緑地や親水護岸を活用して、ミュージシャンやパフォーマーにより日常的に「水辺のコンサート」等を開催し、都市空間における新たな水辺の楽しみ方を創出している。平和記念公園や原爆ドームの傍らを流れる元安川の水辺を主な舞台とし「水の都ひろしま」の風物詩として定着することを目指している。

2005 年５月には、「水辺のコンサート」の一環として、中学校・高等学校の吹奏楽部等による「吹奏楽フェスティバル」が開催された。「水辺のオープンカフェ」のような施設整備だけにとどまらず、このようなイベントの積極的な企画・運営によって、水辺空間に対する市民の関心をさらに高めるとともに、さらなる賑わいを創出する仕組み作りが試行されている。

このように、広島市では水辺の利活用について、全国的にも早くから行政の連携・協働による取り組みが進められるとともに、近年では市民が加わり更なる強化が図られ、市民連携による素地が広く浸透している地域となっている。

写真 3-5：水辺のコンサート

出典：広島市ホームページ

http://www.city.hiroshima.lg.jp/keizai/fanclub/171013/concert.jpg

（３）富山市「富岩運河環水公園」

①事業の経緯

富岩運河環水公園は、富山市の中心部に位置し、神通川を軸に都市河川や運河等の多様な水環境を生かし、広域的な水と緑のネットワークの形成を目的とした「とやま 21 世紀水公園神通川プラン」の一環として、また、富山駅北地区において、鉄道跡地や運河だまりなどの遊休地を有効活用し、都市拠点を形成することを目的とした「とやま都

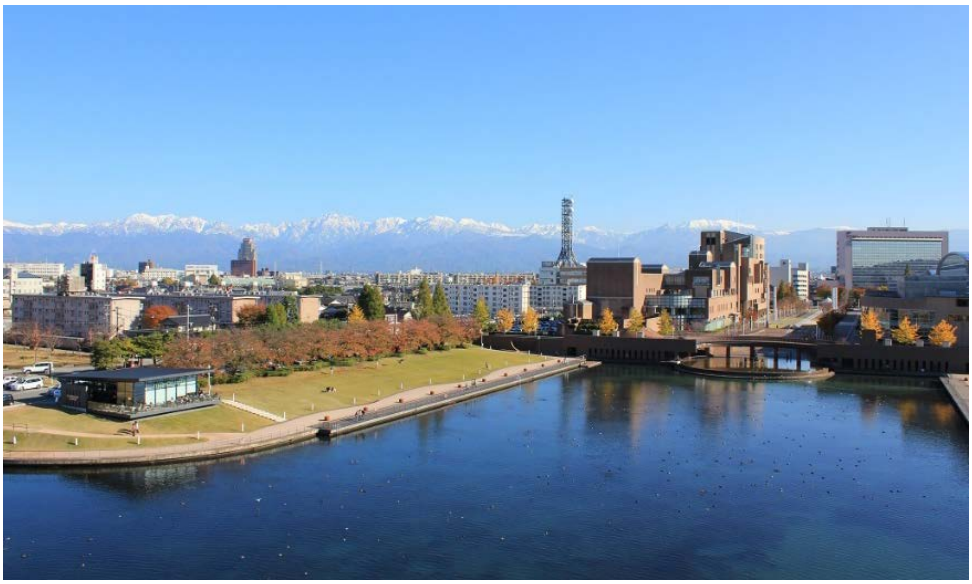
市 MIRAI 計画」のシンボルゾーンとして、富岩運河の再生により自然と人が調和した親水環境を創出した都市公園で、1988 年に整備を着手し、2011 年に完成した。

②事業の概要

水に親しむ場として富岩運河の旧舟だまりを利用した水辺空間を中心に、両岸には遊歩道や芝生のスロープが配置され、親水環境が演出されている。園内には「世界一美しい」と言われているスターバックスコーヒーや「フレンチの鉄人」坂井宏之監修のレストランなどの飲食施設や野外劇場などがあり、人々の憩いの場となっている。

また、公園に隣接して、富山県美術館、富山市総合体育館、サンフォルテ（図書室、ホールなどが入る複合型公共施設）、とやま自遊館（宿泊施設）などが一体的に整備されており、様々な目的で来訪する利用者で賑わいを見せている。

写真 3-6：富岩環水公園全景



出典：富山県ホームページ

http://www.pref.toyama.jp/sections/1113/images/1506-0028.jpg

また、公園では施設整備だけでなく、四季折々のイベントを開催することで、賑わいを創り出している。春には大道芸や縁日が楽しめる「キッズフェスタ」、夏には花火をメインとした「夏まつり」、秋から冬には「イルミネーション」や「スイート・クリスマス」等の実施により、非日常的な空間を演出し、公園にさらなる魅力を付加している。

その他にも、水辺空間の有効活用として、富山県と富山市により運河クルーズ「富岩水上ライン」を運航している。県の旅客船２隻、市の電気ボート１隻の計３隻で定期運航を行うほか、貸切運航も行っている。公園が富山さくらの名所 70 選であることを生かした「お花見クルーズ」や、夏まつりの開催に合わせた「ナイトクルーズ」など景観やイベントを積極的に活用することにより、観光資源としている。

写真 3-7：公園内イベントの様子

出典：富岩水上ラインホームページ https://fugan-suijo-line.jp/?tid=100112

写真 3-8：運河クルーズの様子

出典：富山県ホームページ

http://www.pref.toyama.jp/sections/1113/images/1506-0029.jpg

3.2　空き倉庫の活用によるまちづくり事例

まちなかに魅力ある都市空間を創出する上では、地域の既存ストックを有効活用することが前提である。そこで、住・工が混在した戸田市に潜在する地域資源として、倉庫を活用したまちづくり事例を紹介する。

（1）東京都墨田区　倉庫リノベーション

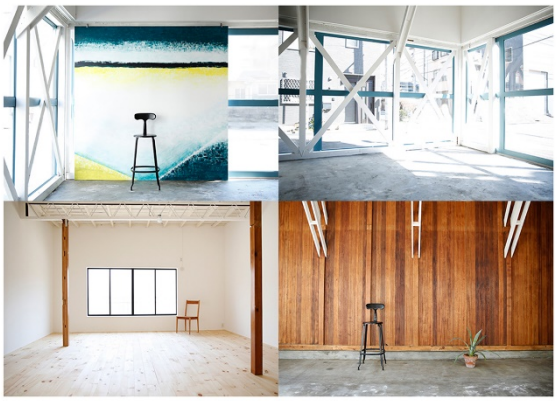
東京都墨田区本所周辺は、ものづくりのまちであるが、近年、事業所数が減少傾向にある。役割を終えた倉庫もある中、地域を南北に流れていた河川が暗渠化され、整備された公園沿いの街区では、空き倉庫が他の用途に転換されたことにより、かつてまちの裏側だった都市空間に変化が生まれている。

倉庫を活用した事例には、次のようなものがある。

図表 3-5：倉庫の活用事例

①ささやカフェ／すみだパークギャラリーささや			
従前の利用用途	水飴の倉庫	現在の利用用途	カフェ、ギャラリー
改修の特徴	公園沿いの立地をいかして公園側に大階段のアプローチを新設		
現在の写真	 出典：すみだパークギャラリーささやホームページ （http://www.gallery-sasaya.com/）		

図表 3-5：倉庫の活用事例（続き）

②たばこと塩の博物館			
従前の利用用途	タバコの倉庫	現在の利用用途	ミュージアム
改修の特徴	博物館開業後も、半分は企業の倉庫として引き続き利用		
現在の写真	 出典：安井建築設計事務所ホームページ（https://www.yasui-archi.co.jp/works/detail/wk-awards/2015_tabacco-salt-museum/index.html）		
③studio PEANUTS			
従前の利用用途	豆の倉庫	現在の利用用途	レンタルスタジオ
現在の写真	 出典：studio PEANUTS ホームページ（http://studiopeanuts.com/）		

図表 3-5：倉庫の活用事例（続き）

④エアリアル・アート・ダンス・プロジェクト			
従前の利用用途	倉庫	現在の利用用途	ダンススタジオ
現在の写真	 出典：エアリアル･アート･ダンス･プロジェクトホームページ （http://www.aerial-artdance.com/article/13283158.html）		

⑤すみだパークスタジオ倉			
従前の利用用途	倉庫	現在の利用用途	劇場
現在の写真	 出典：すみだパークスタジオ倉ホームページ （http://www.theater-sou.com/）		

このうち、①ささやカフェは、改修の際、行政の協力を得て公園側に大階段を設置したことにより、施設周辺に新たな人の流れを生んでいる事例である。用途については、２棟分の改修でカフェ・ギャラリーという異なる用途が並んでおり、まちの多様な側面を知るきっかけの場ともなり得る空間である。また、⑤すみだパークスタジオ倉では、大小５つの稽古場と１つの劇場を営業している。前身を水飴業とする企業が、戦後、倉庫業、スタジオ業へと転換し、現在では、倉庫の約２割を転用しているという。

倉庫は、開口部が少ない一方、天井高が高く、柱の少ない開放的な空間が特徴である。そのため、居住性はあまり高くないものの、改修の自由度が高く、大空間をいかして様々な用途に転換することが可能である。使われなくなった倉庫がこうして活用され、周辺

が複合的な用途のまちへ変化することにより、休日に人の出入りが増えるなど、徐々にまちの印象も変化していくものと思われる。

（２）広島県尾道市　ONOMICHI U2

広島県尾道市は、「瀬戸内しまなみ海道」の本州側の起点となっており、多くのサイクリストが行き交うまちである。2014 年３月に開業した複合施設「ONOMICHI U2」は、JR 尾道駅から徒歩約５分の海沿いに立地する。従前は昭和初期に建てられた海運倉庫（県営２号上屋）であったが、所有する県と管理を委託されている市が 2012 年５月に利活用のためのプロポーザルを行い、設計者の「サポーズデザインオフィス」と企画・運営者の「ディスカバーリンクせとうち」による共同提案が実現した。

民間事業者は、約 2,000 ㎡の倉庫の大空間の中に、自転車ごと宿泊可能なホテル、瀬戸内の地域資源をいかしたライフスタイルショップ、ベーカリー、レストラン等をまちのようにつくり、立ち寄ったサイクリストにも、瀬戸内の旅行者にも、地元住民にも楽しいスペースを提供している。サイクリストが利用しやすい空間として、レンタサイクルも可能なサイクルショップがあるほか、コインシャワー等の設備も施設に併設されている。

また、市が管理するデッキ等の公共空間ともつながっており、多くのイベントが開催されている。

ONOMICHI U2 のある尾道駅西側のウォーターフロントは、それまで遊休港湾の活用のために再開発ビルの建設等が行われていたが、市を訪れる人の大半は、尾道駅東側の山手エリアを回遊しており、にぎわいに欠けていた地区である。この倉庫のリノベーションにより尾道地区の人の流れが変化しており、専門性に特化した魅力的なコンテンツやデザインがまちに与える影響が大きいことがわかる。

写真 3-9：ONOMICHI U2

出典：サポーズデザインオフィスホームページ
（https://www.suppose.jp/works/2014/05/onomichi-u2-part1.html）

3.3　市民協働によるまちづくり事例

都市空間を使いこなす主体は市民であり、有効にかつ持続的に活用していくためには、市民との協働が不可欠である。そこで、官民が連携した取組により、地域の魅力を生み育てているまちづくり事例を紹介する。

（１）東京都台東区　隅田公園

河川敷地を民間事業者が利用した事例として、2013 年 11 月に台東区立隅田公園内の河川区域に出店されたオープンカフェの取組がある。

これは、河川敷地占用許可準則の改正[4]（2011 年４月）を踏まえ、「隅田公園オープンカフェ協議会」が公募し、展望広場、遊歩道（マラソンコース及び公園の園路）と一体をなして整備されたものである。

隅田公園オープンカフェ協議会は、学識経験者、地元団体代表、地域住民、行政（東京都・台東区）により構成され、出店事業者と地域住民、行政が協働して事業を推進していく体制により、計画段階から地域の合意形成が図られた。また、売上げの一部は、地域還元費用として「隅田公園オープンカフェ運営連絡会」に支払われ、イベントの実施や周辺環境の整備など、地域環境への還元に充てることとされている。

イベントは、隅田公園オープンカフェ運営連絡会が出店事業者と連携して企画・実施しており、ライブ、演劇、フェス等が開催されている。

こうした体制構築までには、行政主導できっかけとなる社会実験、住民説明会、協議会設立等が行われた経緯がある。運営において、協議会等により調整し、民間事業者と協定を締結することにより、継続的にオープンカフェに関わり、その利益をまちづくりに使うことができる点が参考となる。

写真 3-10：隅田公園オープンカフェ

出典：台東区ホームページ
（https://www.city.taito.lg.jp/index/bunka_kanko/midokoro/sumidatanoshimi/cafe/opc1.html）

[4] 河川敷地を利用する際の許可基準が緩和され、河川管理者が指定した都市・地域再生等利用区域に限り、民間事業者も「都市・地域再生」のための施設を占用することができるようになった。2016 年に一部改正され、占用許可期間の延長により、民間による河川敷地の有効利用の一層の促進が図られている。

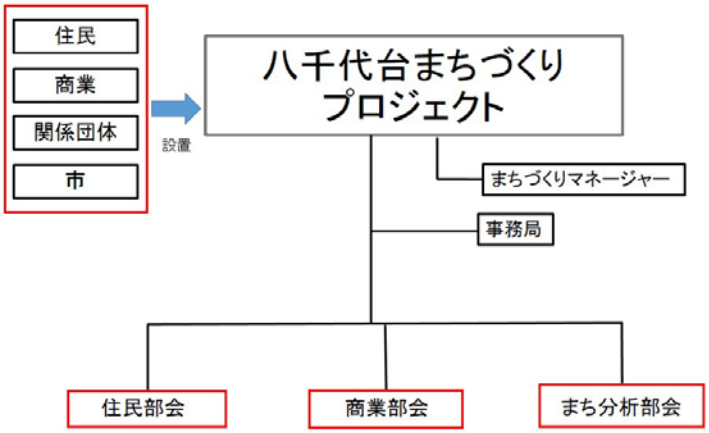
（２）千葉県八千代市　八千代台まちづくりプロジェクト

八千代台地区は、日本初の住宅団地として開発され、現在少子高齢化が課題となっている。

千葉県八千代市では、「八千代市まち・ひと・しごと創生総合戦略」（2016 年３月）を策定し、基本理念である「絆がる・創る“和”のまち八千代」の実現方策として、「八千代台地域活性化人づくりまちづくり事業[5]」を展開している。

「八千代台まちづくりプロジェクト」は、その推進体制として発足し、「住民部会」、「商業部会」、「まち分析部会」の３つの部会で構成される（図 3-6）。住民による当地域の住環境評価とそれに基づく地域再生ビジョンの構築がねらいとされ、2016 年６月から 2017 年３月までに全９回のワークショップ（図 3-7）が開催された。

図 3-6　八千代台まちづくりプロジェクト構成イメージ



出典：八千代市ホームページ（http://www.city.yachiyo.chiba.jp/140500/page100080.html）

図 3-7：住民部会ワークショップのプログラム（参加人数延べ 260 名）

回数	日程	内容
第１回	2016 年６月 27 日	顔合わせ
第２回	2016 年７月 12 日	まち歩きルート検討
第３回	2016 年７月 18 日	まち歩き
第４回	2016 年８月 11 日	相互まち訪問
第５回	2016 年９月１日	キャッチフレーズ決め
第６回	2016 年 10 月 13 日	アクションプラン決め
第７回	2016 年 11 月６日	未来会議
第８回	2016 年 12 月６日	３月のイベント検討会
第９回	2017 年３月６日	３月のイベント決起集会

[5] 地方創生加速化交付金の首都圏近郊モデルとして選定された。

地区別に班分けしたワークショップでは、地域住民と大学生により居住地区のまち歩きや他地区の相互まち訪問を実施し、新たな視点でまちの魅力や問題点を整理するとともに、まちづくりビジョン（キャッチフレーズ）の検討が行われた。このまちづくりビジョンを踏まえ、地域住民と行政の役割分担や、時間軸（短期・中期・長期）を考慮した具体的なアクションプランが検討され、住民主体のイベントの企画へとつながっている。

まちづくりプロジェクトは、2016 年度をもって終了したが、その後の展開として、住民部会及びまち分析部会の活動は、「八千代台まちづくり協議会」へと引き継がれた。

商業部会については、構成員を中心に有志が出資する「八千代台まちづくり合同会社」が 2017 年３月に設立され、様々な経験やスキルをいかし、まちづくりプロジェクトで実施又は検討してきた事業を行っている。主な事業内容は、イベント運営・プロデュース事業、リノベーション事業（遊休不動産の利活用）及び出版事業であり、本祭り等のイベント実施を通じて空き店舗の活用にもつながっている。また、まちづくりプロジェクトにマネージャーとして関わっていた人材が、2017 年度から八千代市まちづくりマネージャーとして地域住民・行政・大学をつなぐ調整役となり、これらの事業のサポートを行っている。

行政側では、まちづくりプロジェクトにおけるワークショップで寄せられた住民意見に対し、実施可能性や優先順位付けの意思決定を行い、住民意見を尊重したハード整備やソフト重視のまちづくり部署の設置を検討することとなった。

まちづくりプロジェクトを通じて役割分担（住民・行政）と時間軸（短期・中期・長期）が明確化し共有されたことで、各主体の連携により地域課題の解決が図られ、まちの魅力の再発見につながった事例といえる。

第４章　市民アンケート

4.1　アンケートの目的

戸田市をより「おしゃれ」にしていくために、20～40 代の戸田市民のライフスタイルを整理分析し、戸田市に対するイメージやおしゃれに関する意識を明らかにすることにより、今後の戸田市のあるべき姿を展望する。

4.2　アンケートの概要

（１）方法　　郵便配布・郵便回収
（２）対象者　　2017 年 12 月 1 日時点で戸田市在住の 20 歳～49 歳の男女 3,000 人
　　【参考】2017 年 12 月 1 日時点の人口：138,662 人
　　2017 年 12 月 1 日時点の 20 歳～49 歳男女人口：65,713 人
（３）抽出方法　　住民基本台帳に基づく無作為抽出
　　（年齢 5 歳刻み、居住区の人口比率を基準）
（４）調査機関　　2018 年 1 月 22 日～2 月 15 日
（５）回収状況　　回収票：1,088 票（回収率 36.2%）
　　有効回答数：1,084 件
（６）アンケート項目　　全 25 問

4.3　アンケートの結果（抜粋）

（１）　回答者自身について

１．居住エリア				
選択肢	全体（ｎ＝1084）		【参考】（ｎ＝65713）	
	回答数	割合	地区人口	割合
下戸田地区	293	27.0%	18,455	28.0%
上戸田地区	288	26.5%	15,408	23.4%
新曽地区	274	25.3%	16,330	24.9%
笹目地区	120	11.1%	8,914	13.6%
美女木地区	107	9.9%	6,606	10.1%
無回答	2	0.2%		

下戸田地区：喜沢、中町、下戸田、喜沢南、下前、川岸
上戸田地区：上戸田、大字上戸田、本町、南町、戸田公園
新曽地区　：大字新曽、新曽南、氷川町、大字下笹目
笹目地区　：笹目南町、笹目北町、早瀬、笹目

美女木地区：美女木、美女木東、大字美女木

図表 4-1：居住エリア図

出典：「戸田市ハザードブック第３版」（2017）

２．戸田市へ抱いている感情（複数選択可）		
選択肢	全体（n＝1084）	
	回答数	割合
誇りがある	58	5.4%
愛着がある	521	48.1%
洗練されている	14	1.3%
活気がある	160	14.8%
身近である	540	49.8%
自慢したい	66	6.1%
守りたい	72	6.6%
貢献したい	84	7.7%
この中にはない	170	15.７%
無回答	41	3.8%

３．戸田市に愛着があると回答した人の居住年数			
戸田市での居住年数	全体（ｎ＝1084）	愛着がある人（ｎ＝521）	
	回答数	回答数	全体に占める割合
１年未満	33	7	21.2%
１～３年未満	109	39	35.8%
３～５年未満	111	34	30.6%
５～１０年未満	197	71	36.0%
１０～２０年未満	256	121	47.3%
２０年以上	364	242	66.5%
無回答	14	7	50.0%

４．戸田市に愛着があると回答した人の地域活動やイベントへの参加状況			
戸田市の地域活動や イベントへの参加状況	全体（ｎ＝1084）	愛着がある人（ｎ＝521）	
	回答数	回答数	全体に占める割合
参加している	275	147	53.5%
参加していない	804	370	46.0%
無回答	5	4	80.0%

５．参加したことのある地域活動やイベント等			
朝市	82 件	商工会	7 件
町内会	80 件	消防団	5 件
ＰＴＡ	27 件	さんま祭り	4 件
ふるさと祭り	18 件	盆踊り	2 件
子ども会	15 件	健康福祉まつり	2 件
花火大会	12 件	ボーイ・ガールスカウト	2 件
上戸田ゆめまつり	11 件	アートむすび市	1 件
上戸田ハロウィン	8 件	収穫祭	1 件
ママフェス	7 件		

アンケートの結果から、居住年数が長い市民ほど愛着を感じることが多く、また、地域活動やイベントへ参加している市民は、参加していない市民よりも愛着を感じる割合が多いと考えられる。居住年数の短い市民が参加したいと感じる地域活動やイベントがあると愛着を感じる市民も増えるのではないかと思われる。

６．戸田市に愛着があると回答した人の年齢 地域活動に参加していると回答した人の年齢					
年齢	全体 （ｎ＝1084）	愛着がある人 （ｎ＝521）		地域活動参加者 （ｎ＝275）	
	回答数	回答数	全体に占める割合	回答数	全体に占める割合
２０～２４歳	105	70	66.7%	7	6.7%
２５～２９歳	130	68	52.3%	16	12.3%
３０～３４歳	178	87	48.9%	41	23.0%
３５～３９歳	203	87	42.9%	68	33.5%
４０～４４歳	236	95	40.3%	65	27.5%
４５～４９歳	229	111	48.5%	78	34.1%
無回答	3	3	100.0%	0	0.0%

７．戸田市に愛着があると回答した人の居住継続について 地域活動・イベントに参加している人の居住継続について					
戸田市への居住継続について	全体 （ｎ＝1084）	愛着がある人 （ｎ＝521）		地域活動参加者 （ｎ＝275）	
	回答数	回答数	全体に占める割合	回答数	全体に占める割合
ぜひ住み続けたい	382	260	68.1%	132	34.6%
できれば住み続けたい	526	224	42.6%	116	22.1%
あまり住み続けたいと思わない	50	6	12.0%	8	16.0%
わからない	113	26	23.0%	16	14.2%
無回答	13	5	38.5%	3	23.1%

８．戸田市にぜひ住み続けたい/できれば住み続けたいと考える理由（３つ選択）					
選択肢	全体（ｎ＝908）		選択肢	全体（ｎ＝908）	
	回答数	割合		回答数	割合
通勤・通学の利便性	473	52.1%	防災	1	0.1%
買い物など日常生活の利便性	468	51.5%	防犯・治安	57	6.3%
市街への交通の利便性	394	43.4%	子育て環境	220	24.2%
市内の交通の利便性	44	4.8%	教育環境	28	3.1%
住環境	295	32.5%	生まれ育ったところだから	213	23.5%
水	34	3.7%	今の戸田が好きだから	63	6.9%
緑	52	5.7%	その他	39	4.3%
医療環境	84	9.3%	無回答	62	6.8%

第５章　実証実験

5.1　実証実験の実施に至る経緯

第４章では、市民向けのアンケート調査の結果を報告したが、この調査の中では、市民の認知度が高く、対外的に誇れるものとして「戸田ボートコース」が挙げられている。一方で、同ボートコースは、市民が日常的に利用しているものではないことも調査から明らかになっている。これらの調査結果を受け、住民がつくるおしゃれなまち研究会では、2017 年２月に開催された第４回研究会にて、戸田公園高台広場でイベントを実施できないかとの提案があった。

県営戸田公園高台広場（以下、「高台広場」という）は、ボートコース南側に沿って健康遊具やベンチが整備されており、ボート競技で使用される観客席から自由に行き来が可能となっている。1964 年の東京オリンピックで使用された聖火台が残っているため、ボート競技者からはボートコースと併せていわゆる「聖地」とされているほか、大会中は選手や観覧者の休憩場所として利用されている。一方で、背の高い木々が多くうっそうとしている印象もあることから、聖火台の位置も含め住民からの認知度が高いとは言い難い。

そこで、戸田市の代表的な水辺空間である戸田ボートコースと高台広場を中心に、実証実験を実施する。住民主導型のイベント開催により、住民と水辺空間とのつながり創出や、住民の「おしゃれ感をもっと刺激する」ことを狙い、戸田市への共感を高める効果について検証することを目的とする。

なお、住民のおしゃれ感を刺激する仕組みづくりとして、次の項目を展開することで、「シビックプライド」「住民参加」の高まりを明らかにしていく。

(1)　刺激空間、刺激づくりに長けた運営者のデータ収集と分析
(2)　住民を刺激する時空間の選定
(3)　企画・運営者と行政との連携
(4)　イベント実施の効果測定
(5)　効果を反映した新たな時空間づくりへの展開
(6)　おしゃれへの共感意識を広めるためのネットワークづくり

5.2　実証実験当日

2017 年７月 15 日の実証実験当日、PT はイベントの行われている様子を写真に収め、記録することを適宜実施した（当日の様子は第５章 5.5～5.7 にて詳述する）ほか、共同研究会事務局との協力により、来場者・学生・出店者に対するアンケート調査（調査の内容や報告については第５章 5.8～5.10 にて詳述する）を実施した。

また、イベント全体の見守りやシルバー人材センター職員との連携による駐輪場の誘導・整備、ボートコースの見回りを通して出店者、ボート競技者、イベント来場者との

ふれあいや様子を観察している。

そのほか、実証実験に当たっては、高台広場でのイベントとボートコースでのイベントという 2 つのイベントを同時に開催することとなった。以下にて、それぞれのイベントで企画運営を行った団体をそれぞれ紹介する。

5.3　高台広場でのイベント

高台広場では、「水辺で遊ぼう♪くらふとカーニバル ～in 東京 1964 オリンピックボート会場戸田ボートコース～」（以下、「くらふとカーニバル」という。）が行われた。くらふとカーニバルの実施に当たり、市民団体である「戸田マルシェ[6]」にイベントの企画運営を依頼した。戸田マルシェは過去にも市内で「朝市」や「アートむすび市」といったイベント実施の実績を持っている。これらのイベントでは、オリジナルの手工芸品の展示・販売、商店会と連携した飲食物の販売、ワークショップ、音楽・ダンスステージの催し等が行われており、クリエイターの活動支援も兼ねている。また、過去に複数回の開催実績から、イベント運営のノウハウがあり、クリエイター及び出店者や参加者との関係を構築しているといった点が特徴として挙げられる。さらに、ホームページや SNS といったインターネットを活用したイベント告知も活発に行っており、最新のトレンドに敏感な層への PR を仕掛けている。

また、戸田マルシェは、過去に高台広場でのイベント開催の意向があったものの、手続や費用などの理由から実施しなかったといういきさつがあった。くらふとカーニバルは、共同研究会での調査として戸田市が高台広場の利用申請者となったことから実現したものである。

(1) 日時：2018 年 7 月 15 日(日)午後 1 時～午後 7 時
(2) 場所：戸田公園(高台広場、戸田ボートコース周辺)
(3) 名称：『水辺で遊ぼう くらふとカーニバル ～in 東京 1964 オリンピックボート会場戸田ボートコース～』
(4) 主催：戸田市
(5) 企画・運営：戸田マルシェ・アートむすび市実行委員会
(6) 協力：住民がつくるおしゃれなまち研究会、中央商店会、戸田朝市実行委員会、公益財団法人埼玉県公園緑地協会戸田公園管理事務所
(7) 内容：① 戸田ボートコース、ボート競技に関連する物品展示
② 市民作成のクラフト(手工芸品)の展示・販売
③ 市内業者等の飲食物の販売

---

[6] 戸田マルシェホームページ（http://todamarche.com）によると、「戸田をもっと楽しい♪もっとお洒落な街に♪」をコンセプトに、戸田近辺情報の発信やクリエイティブな活動家と、場所を提供する店や人を繋ぐことを目的として活動している。

④ オリジナル製品のワークショップ(対象:子ども・大人)
⑤ ステージでの市民団体音楽・ダンスイベント(参加対象:子ども・大人)
⑥ 水を利用した遊びの場(水かけまつり)の提供(対象:子ども)
⑦ 会場の様子

(8)来場者数：約 2,000 人
(9)出店者数：35 店舗(飲食ブース 31 店舗、車内販売 4 店舗)

5.4 ボートコースでのイベント

戸田ボートコースには、大学や実業団が設置する 32 の艇庫があり、艇庫に併設された合宿所に住民票を移し共同生活を行っている学生も多くいる。また、ボートコース近隣の町会である旭が丘町会との交流はあるものの、基本的には住民との交流が少なく、艇庫に住む学生同士も大会などでは競い合っているが、日常的な交流はほとんど行われていない。

そうした中で、ボート競技の認知度向上や大学同士の横断的な繋がりの創出、住民、特にボートコース近隣住民からのボート競技に対するさらなる理解を深めること、ボート競技者のモチベーション維持を目的として、有志のボート競技者・指導者により活動が行われつつあった。この活動の中心となっている中央大学ボート部戦略マネージャー（中央大学 OB）を務める村井晋平氏は、この活動の中心となって動いており、奇しくも実証実験の実施と同日である 7 月 15 日にボートコースで大学対抗タイムトライアルを開催しようとボートコースの利用申請を行っていた。このタイムトライアルは単なる記録会ではなく、近隣の住民に向け、ボート競技を知ってもらえる、身近に感じてもらえることを狙いとしており、実証実験とは全く別々に動いているものであった。

共同研究会では、くらふとカーニバルは高台広場だけではなく、ボートコースでもレース観戦やボートの試乗体験ができれば、より来場者が見込め、アンケート調査にも寄与できるのではないかとの意見があった。さらに、住民の水辺やボート競技への関心を高められることは、戸田市に愛着を持つきっかけになるのではないかという効果も期待された。そこで、大学対抗タイムトライアルの話を聞いたことから村井氏へ連絡を取り、イベントの同時開催へとつながっていった。

今回は偶然にも開催日が同じであったために高台広場とボートコースでイベントが実現したが、ボート競技者との交流やボート競技観戦を望む戸田市及び戸田マルシェと、集客や住民にボート競技への理解を深めてもらいたいと考える有志のボート競技者・指導者の思惑が一致したものであった。

(1)日時：2018 年 7 月 15 日(日)午前 9 時～午後 3 時
(2)場所：戸田ボートコース、艇庫
(3)名称：「Abeam Sprint Regatta」

(4)主催・企画・運営：Sprint Regatta 実行委員会(戸田ボートコース関係大学有志、代表中央大学)
(5)競技参加対象：大学生
(6)開催主旨：戸田ボートコースやボート選手、ボート競技の魅力を地域や一般の方へ発信する。
(7)内容：① ボートレース 500m レース 男女エイト
② 競技用ボート試乗体験
③ ボート練習機器(エルゴメーター)の体験と紹介
④ 艇庫スタンプラリー:11 校の艇庫を巡りスタンプを集める
(8)レース参加学校数：17 校(戸田ボートコースの大学艇庫 22 校)
(9)レース参加学生数：216 人
(10)ボランティア参加学生：117 人(水かけまつり、スタンプラリー、ボート試乗体験)

5.5 当日の様子

(1) 高台広場でのイベント

① 戸田ボートコース、ボート競技に関連する物品展示

1964 年に開催された第 18 回オリンピック競技大会で、戸田ボートコースはボート競技で使用された。文化スポーツ課が、当時の競技や聖火台の様子について写真で紹介するとともに、物品等について展示を行った。また、第 32 回オリンピック競技大会及び東京 2020 パラリンピック競技大会のチラシやうちわを配布する等、機運醸成を図った。

写真 5-1：物品展示の様子

② 市民作成のクラフト(手工芸品)の展示・販売

各店舗から、おしゃれなバッグやアクセサリ等のハンドクラフト雑貨、オリジナルグッズ等が展示・販売された。ぬくもりのある暖かいデザインは、多くの人から共感を集めていた。

写真 5-2：展示・販売の様子

③ 市内業者等の飲食物の販売

各店舗から、ビール、焼きそば、から揚げ等の飲食物が販売された。当日は猛暑となり、中でもかき氷の店には長蛇の列ができ、人気を集めていた。

写真 5-3：飲食物販売の様子

④ オリジナル製品のワークショップ

当日はハーバリウムによるネックレス作り、森林認証材でのシェーカー作り、工作ワークショップ等が行われた。ワークショップでは、一人では始めにくいことでも、教わりながら作ることができ、コミュニケーションや学ぶことの楽しみについて、多くの人が体感することができた。

写真 5-4：ワークショップの様子

⑤ ステージでの市民団体音楽・ダンスイベント

高台広場の聖火台付近では、「くらばるステージライブ」が開催された。会場最奥のステージ上で、各団体から音楽の演奏やダンスが披露された。楽器演奏やフラダンス等のイベントが行われる度に、会場は大いに盛り上がった。また、フラダンスサークルの会場ねり歩きも後半に行われ、会場全体が手拍子を送った。

写真 5-5：「くらばるステージライブ」の様子

⑥ 水を利用した遊びの場(水かけまつり)の提供

水かけまつりでは、シャボン玉や水鉄砲等を用いて、大人から子どもまで楽しんでいた。ボランティアで参加したボート部員も子どもたちの安全を見守りつつ、積極的にイベントに参加し、イベントの盛り上げに大きく貢献していた。当日は水鉄砲を販売していたこともあり、時間が経つにつれ、見る側から遊ぶ側にシフトしていた。

写真 5-6：水かけまつりの写真

⑦ 会場の様子

大学ボート部と市民が協力した祭りは、戸田ボートコース及び高台広場では初となり、約 2,000 人の入場者を記録した。当日は 35 店舗が出店し、親子連れなど多くの市民でにぎわった。市長からはボートコースについて、さらに PR を進めていく旨の説明があった。

写真 5-7：会場看板、聖火台等の様子

(2) 戸田ボートコースでのイベント

① ボートレース 500m レース 男女エイト

17 大学のボート部が参加するエイト競技の 500 メートルレガッタが開催された。主催は大学 OB や学生ら 20 人による「スプリントレガッタ実行委員会」で、大学ボート部 17 校が参加する大規模のレース大会となった。レースに参加した選手以外にも、ボランティアで参加した同部員は総勢約 400 人であった。

ボランティアは、後述するスプリントレガッタ実行委員会の主催するイベントのほか、水遊びイベントにも参加し、両方のイベントの盛り上げ役となった。レースの優勝は男子は中央大学、女子は中央、立教、明治、一橋大のミックスチームだった。

写真 5-8：500 メートルレガッタの様子

② 競技用ボート試乗体験

小学校４年生以上を対象に競技用ボートの試乗体験を行った。試乗者は普段乗ることのない競技用ボートに乗り、ボートを実際に操ぐ感覚を体験することができた。

写真 5-9：試乗体験の様子

③ ボート練習機器(エルゴメーター)の体験と紹介

ボートコースの近くでは、エルゴメーターが設置され体験と紹介が行われた。エルゴメーターは、適切な運動強度でトレーニングを実施することができ、身体能力の向上や健康増進の管理に役立つため、実際に漕手が使用しているものである。こちらも多くの人が、トレーニングの感覚を体験することができた。

写真 5-10：エルゴメーターの体験と紹介

④ 艇庫スタンプラリー:11 校の艇庫を巡りスタンプを集める

大学ボート部員らによるスタンプラリーも行われた。 11 校の艇庫を巡るスタンプ集めは、景品も用意され子どもたちにも人気であった。

写真 5-11：スタンプラリーの様子

(3) 参考資料

① イベントチラシ

② 会場配置図

5.6　来場者へのアンケート

【目的】

(1) 戸田市の特徴的な地域資源である「水辺空間」を調査フィールドとして設定し、戸田市の魅力の具体的要素として、水辺空間の生かし方を検証する。

(2) 戸田市、住民、ボート関係者の今後の関係・連携のあり方について検証する。

【概要】

(1) 調査対象：「水辺で遊ぼう　くらふとカーニバル～in 東京 1964 オリンピックボート会場戸田ボートコース～」来場者約 2,000 名のうち、101 組

(2) 調査方法：ヒアリング（聞き取り）

【結果（抜粋）】

(1) 来場者について

来場時の人数（n=101）

	回答数	割合
一人	9	8.9%
友達	24	23.8%
家族	68	67.3%
合計	101	100.0%

会場までの交通手段（複数回答あり n=107）

	回答数	割合
徒歩	23	21.5%
自転車	48	44.9%
オートバイ	0	0.0%
バス	1	0.9%
車	21	19.6%
電車	14	13.1%
合計	107	100.0%

居住地区（n=101）

	回答数	割合
下戸田地区	33	32.7%
上戸田地区	18	17.8%
新曽地区	11	10.9%
笹目地区	4	4.0%
美女木地区	2	2.0%
市外	28	27.7%
未回答	5	5.0%
合計	101	100.0%

下戸田地区：喜沢、中町、下戸田、喜沢南、下前、川岸

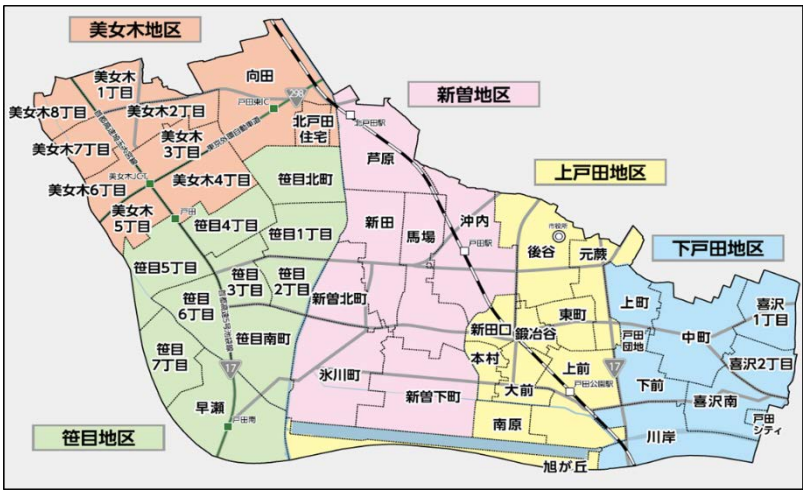
上戸田地区：上戸田、大字上戸田、本町、南町、戸田公園

新曽地区：大字新曽、新曽南、氷川町、大字下笹目

笹目地区：笹目南町、笹目北町、早瀬、笹目

美女木地区：美女木、美女木東、大字美女木

図表 5-1：地区区分



出典：「戸田市ハザードブック第３版」（2017）

来場頻度（n=101）

	回答数	割合
毎週	12	11.9%
月に１回	20	19.8%
３か月に１回	9	8.9%
半年に１回	17	16.8%
年に１回	21	20.8%
初めて	20	19.8%
無回答	2	2.0%
合計	101	100.0%

（2）イベントについて

来場の動機（複数回答ありn=106）

	回答数	割合
口コミ	20	18.9%
チラシ	43	40.6%
企画・運営団体 SNS	14	13.2%
ボート関係 SNS	9	8.5%
何となく立ち寄った	3	2.8%
市の広報誌	3	2.8%
市のホームページ	3	2.8%
市の SNS	2	1.9%
その他	9	8.5%
合計	106	100.0%

コンテンツへの評価（複数回答ありn=153）

	回答数	割合
物品	10	6.5%
飲食物	48	31.4%
ステージ（出し物）	19	12.4%
ワークショップ	14	9.2%
水かけ遊び	31	20.3%
艇庫開放スタンプラリー	7	4.6%
レガッタ観戦	20	13.1%
ボート漕ぎ体験	3	2.0%
その他	1	0.7%
合計	153	100.0%

学生との交流の感想（複数回答あり n=105）

	回答数	割合
親しみを感じた	21	25.9%
競技を観戦してみたい	1	1.2%
活動を応援したい	15	18.5%
いいことだと思う	35	43.2%
ボートに興味を持った	7	8.6%
その他	2	2.5%
無回答	24	0.0%
合計	105	100.0%

（4）今後について

開催希望（n=101）

	回答数	割合
希望する	97	96.0%
希望しない	4	4.0%
合計	101	100.0%

開催会場（n=72）

	回答数	割合
戸田公園	58	80.6%
どこでもよい	4	5.6%
別の場所	10	13.9%
合計	72	100.0%

戸田公園利用促進のために必要だと思うもの（n=212）

	回答数	割合
飲食施設	36	17.0%
カフェ	32	15.1%
イベント	27	12.7%
サイクリングステーション	14	6.6%
ランニングステーション	13	6.1%
バスの増発	12	5.7%
ベンチ	11	5.2%
キッチンカー	10	4.7%
シャワースペース	9	4.2%
芝生	8	3.8%
照明	6	2.8%
遊具	5	2.4%
コンビニ・売店	4	1.9%
トイレ	4	1.9%
子どもが遊べる場所	2	0.9%
日陰	2	0.9%
駐車場	2	0.9%
レンタサイクル	2	0.9%
噴水・水遊びができる場所	2	0.9%
親子で遊べる場所	1	0.5%
子どものサイクリングコース	1	0.5%
自販機	1	0.5%
商業施設	1	0.5%
水道	1	0.5%
その他	6	2.8%
合計	212	100.0%

5.9　学生アンケート

【概要】

（1）調査対象：学生ボランティア約 400 名のうち、116 名

（2）調査方法：紙面配布、郵便により回収

【結果（抜粋）】

（1）回答者について

イベントへの参加形態（n=116）

	回答数	割合
レガッタの選手	88	75.9%
来場者	3	2.6%
レガッタの運営スタッフ	8	6.9%
水かけ遊びのスタッフ	9	7.8%
スタンプラリーのスタッフ	2	1.7%
イベント全般の運営スタッフ	1	0.9%
その他	3	2.6%
無回答	2	1.7%
合計	116	100.0%

（2）今後について

今後のイベントへの参加希望（n=116）

	回答数	割合
参加したい	106	91.4%
参加したくない	9	7.8%
無回答	1	0.9%
合計	116	100.0%

理由（抜粋）

参加したい
・500mのレースが新鮮だったから ・もっとボートを知ってほしいから ・エンターテイメントとしてのボートが観られてよかったから ・他大学の学生や市民と交流できてよかったから ・大学、高校の文化祭に力を注げなかった分、お互いのことを理解できるボート部の学生同士でつくり上げる楽しいイベント（広報活動）だったから ・リフレッシュできたから
参加したくない
・シーズン中のため負担であるから （国体ブロック予選と日程がかぶり参加できなかった） ・エキシビションがよくわからなかったから ・ボートを見ている人がいなかったから ・水かけ遊びがイベントのメインになっていたから

感想

・予想以上に水かけ遊びが盛り上がっていた ・家族連れが多くて素敵だった ・市民とボートについて話すことができ交流を深められた ・他大学の学生と仲良くなれた ・ボートの魅力を伝えられた ・市民がボートに夢中になっていてとても嬉しかった ・戸田の町おこしの雰囲気が感じられた ・暑かった ・何が目的なのか、理解できる成果があげられていない印象を受けた

戸田公園での開催希望（n=116）

	回答数	割合
開催したい	112	96.6%
開催しなくてもよい	3	2.6%
無回答	1	0.9%
合計	116	100.0%

理由（自由記述・抜粋）

開催したい
・市民と交流できるから ・スポーツ観戦が好きだから ・多くの人にボートを知ってもらいたいから ・毎年開催すれば、年間行事にできると思うから ・他大学と関われるから ・戸田市が明るいまちになってほしいから ・戸田市を盛り上げたいから
開催しなくてもよい
・戸田公園では来場者があまり集まらないから

戸田公園の利用促進のために必要だと思うもの（複数回答あり n=320）

	回答数	割合
飲食施設	72	22.5%
カフェ	51	15.9%
イベント	54	16.9%
サイクリングステーション	24	7.5%
ランニングステーション	24	7.5%
バスの増発	13	4.1%
ベンチ	12	3.8%
キッチンカー	16	5.0%
シャワースペース	15	4.7%
芝生	18	5.6%
照明	7	2.2%
その他	14	4.4%
合計	320	100.0%

5.8　出展者アンケート

【概要】

（1）調査対象：出店者 30 団体のうち、27 団体

（2）調査方法：ヒアリング（聞き取り）

【結果】

（1）回答者について

出店動機（複数回答あり n=30）

	回答数	割合
主催者に勧められた	19	63.3%
場所	1	3.3%
イベントに興味があった	8	26.7%
その他	1	3.3%
その他	1	3.3%
合計	30	100.0%

戸田公園の利用促進のために必要だと思うもの（複数回答あり n=75）

	回答数	割合
飲食施設	5	6.7%
カフェ	8	10.7%
イベント	14	18.7%
サイクリングステーション	5	6.7%
ランニングステーション	2	2.7%
バスの増発	4	5.3%
ベンチ	6	8.0%
キッチンカー	5	6.7%
シャワースペース	5	6.7%
芝生	4	5.3%
照明	4	5.3%
遊具	1	1.3%
駐車場	2	2.7%
噴水・水遊びができる場所	1	1.3%
その他	9	12.0%
合計	75	100.0%

第６章　提言

6.1　提言３本の柱

これまでの章で述べた市民アンケートや実証実験等を通して見たときに、戸田市の改善点として次の３点が挙げられる。

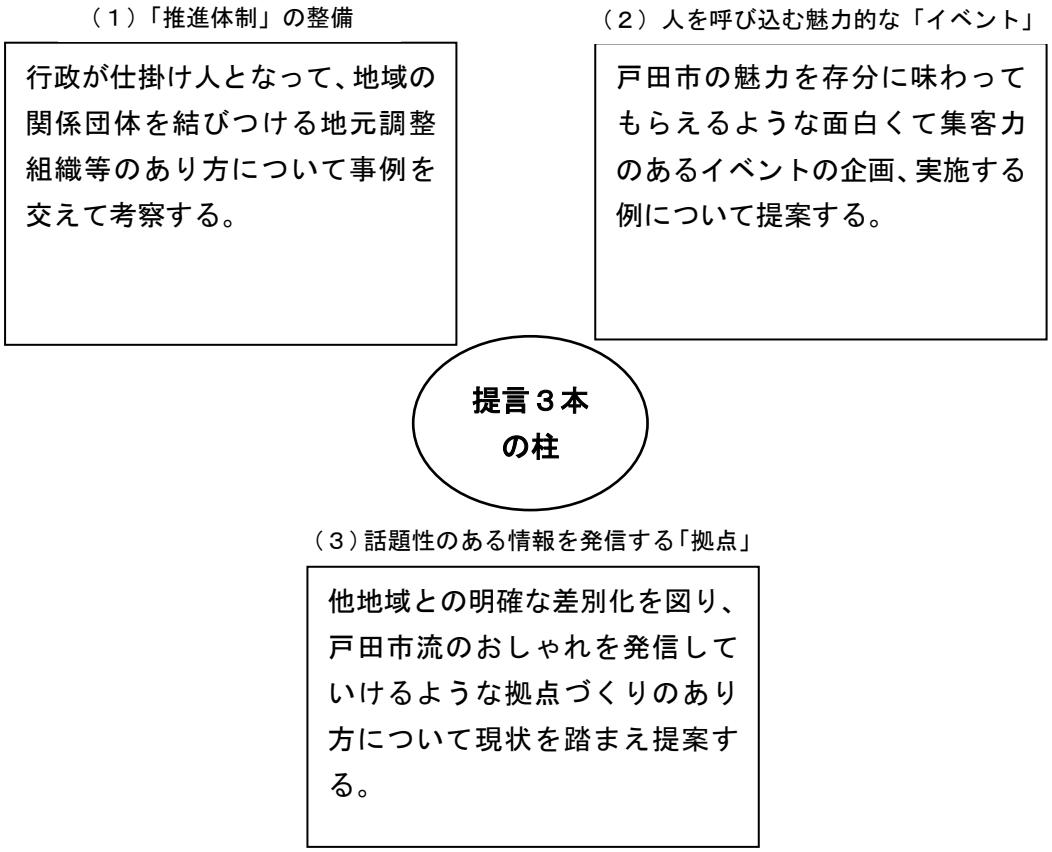
① 水辺空間とまちを繋ぐ連携不足
② 実施主体の欠如
③ 差別化の図られない地域性

そこで、戸田市の現状を理想像である『戸田市流おしゃれなまちを実現する水辺空間を活用した豊かなライフスタイル』の具体像に近づけていくためには、各分野での問題点を解決する手法として下記のとおり３本の柱を提言する。

（１）「推進体制」の整備
（２）人を呼び込む魅力的な「イベント」
（３）話題性のある情報を発信する「拠点」

3 本の柱の個別の趣旨については、順次述べることとする。

図表 6-1：提言３本の柱



（１）「推進体制」の整備

新しい取り組みを行うときに、第一に求められることは「誰が、何をどのように」行うのかという見通しである。中でも、「誰が」行うのかという点は大変根本的な問題である。これまで、まちづくりや地域産業の振興策については、主に行政や公的機関が主体となり、個別に推進を図ってきたが、従来型の個別の取り組みだけでは、水辺空間とまちを繋ぐ連携を図ることか難しいと考える。

このようなことから、行政が仕掛け人となり、地域の関係団体を結ぶ地元調整組織等の形成について他市の事例を交えて考察する。

（２）人を呼び込む魅力的な「イベント」

次に「何をどのように」行うのかという点が問われてくるが、戸田市の魅力を存分に味わってもらえるような面白くて集客力のあるイベントを積極的に開催していく必要がある。特に、地域の関係団体との連携を図り、単発的なイベントだけではなく、住民が表現できる場になるような継続的なイベントを提供できるようにしていく。

これを踏まえて、五感を刺激するようなイベント企画の例について提案する。

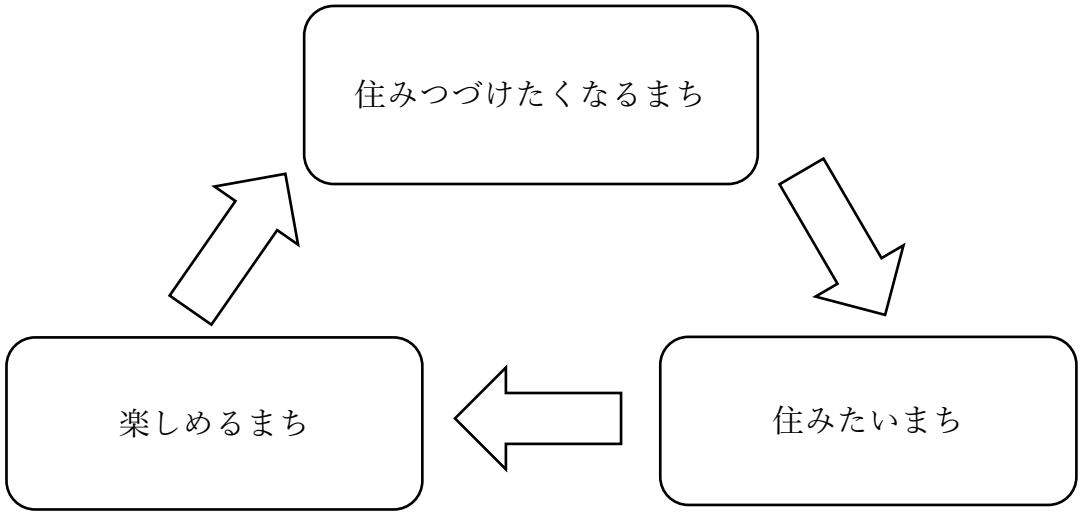
（３）話題性のある情報を発信する「拠点」

地域振興の仕掛けがある程度定着し、事業実施等の目途が立ってきたら、これを継続していけるような事業展開を図っていく必要がある。

また、戸田市流のおしゃれの発信基地となるような拠点づくりのあり方や手法を考えることによってシビックプライドを醸成するために重要であると考える。

このようなことから、戸田市の代表的な水辺空間を活用した拠点施設について提案する。

図 6-2：住民が地元で過ごせる豊かなライフスタイルの構築



6.2 「推進体制」の整備

（１）方向性・必要性について

理想を実現するために解決すべきことの一つとして、「実施主体の欠如」がある。本章においては、戸田市としてのあり方を考察する。

一般的にまち全体の人や組織をマネジメントするのは行政（自治体）であり、首長がリーダーシップを発揮して官民一体となって魅力アップに取り組むのが理想である。

しかし、現実は「営利に係る部分が大きいこと」、「具体的な企画のできる専門家がいないこと」等から、自治体主導のやり方には限界があると考えられる。

そこで、営利活動が容易に行うことのできる組織を設置し、地域で活動している住民や団体等と協働で「おしゃれなまちのマネジメント」をしていく。

本研究テーマが「住民がつくるおしゃれなまち研究会」であるが、おしゃれなまちをつくる主体として「住民」がキーワードであり、主体となり得るような人材や団体の発掘が必要不可欠である。近年、戸田市が主催するイベント以外にも、地元団体が中心となったイベントが開催され、住民の表現する場として少しずつ賑わいをみせている。これらは、住民サイドからの自主的な活動から生まれている流れであり、この流れを住民主体のおしゃれなまちづくりにどう落とし込んでいけるのかを検討する必要がある。

（２）事例

ここで、戸田市と同じ首都圏近郊モデルとして、千葉県八千代市八千代台まちづくりプロジェクトの取り組みについて事例紹介を行う。

八千代台地区は、日本初の住宅団地として開発され、少子高齢化が課題となっている。千葉県八千代市では、「八千代市まち・ひと・しごと創生総合戦略」（平成 28 年３月）を策定し、基本理念である「絆がる・創る“和”のまち八千代」の実現方策として、「八千代台地域活性化人づくりまちづくり事業[7]」を展開している。

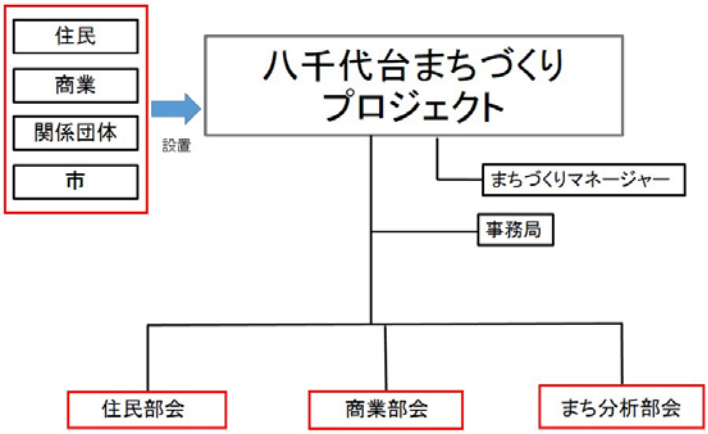
「八千代台まちづくりプロジェクト」は、その推進体制として発足し、「住民部会」、「商業部会」、「まち分析部会」の３つの部会で構成される（図 6-3）。住民による当地域の住環境評価とそれに基づく地域再生ビジョンの構築がねらいとされ、2016 年６月から 2017 年３月までに全９回のワークショップが開催された。

地区別に班分けされたワークショップでは、地域住民と大学生により居住地区のまち歩きや他地区の相互まち訪問を実施し、新たな視点でまちの魅力や問題点を整理するとともに、まちづくりビジョンの検討が行われた。まちづくりプロジェクトは、2016 年度をもって終了したが、その後住民部会及びまち分析部会の活動は、「八千代台まちづくり協議会」へと引き継がれ、商業部会については、構成員を中心とした「八千代台まちづくり合同会社」が設立され事業を行っている。

---

[7] 地方創生加速化交付金の首都圏近郊モデルとして選定された。

図 6-3：八千代台まちづくりプロジェクト構成イメージ



出典：八千代市ホームページ（http://www.city.yachiyo.chiba.jp/140500/page100080.html）

首都圏近郊に位置する戸田市や八千代市は、東京のベットタウンとして発展し、都会でも田舎でもない中間的な立場にある市であることから、観光資源にも乏しく、どちらかというと現状の子育て世代を有する安定した人口を生かしたまちづくりが主体となる。

まちづくりを進めていくうえで必要不可欠なのは、地域活性化の一助となる商業の力であり、様々な経験や商業のスキルを生かし、イベントの企画や運営等、行政にはできない部分を担ってもらうことにより、地域の魅力発信にもつながると考える。

また、行政はワークショップの開催やアンケート結果等を通じ、住民の意見を集約し、実現性や必要性について、分析及び優先順位づけを行い、住民の意見を反映させた、ハード整備やソフト重視のまちづくり実現に向けて検討を行い、あわせて地域住民・行政・関係団体をつなぎ調整役となるような、まちづくりマネージャーの発掘及び育成が必要であると考察する。

6.3　人を呼び込む魅力的な「イベント」

（１）方向性・必要性について

市内に点在する水辺空間を活用し、戸田市の魅力を存分に味わってもらえるようなおしゃれで集客力のあるイベントを積極的に開催していく必要がある。特に、地域の関係団体との連携を図り、単発的なイベントだけではなく、住民が表現できる場になるような継続的なイベントを提供できるようにしていく。これを踏まえて、五感を刺激するようなイベント企画の例について提案する。

（２）コンセプト

ア　水辺空間の魅力に触れて五感を刺激する

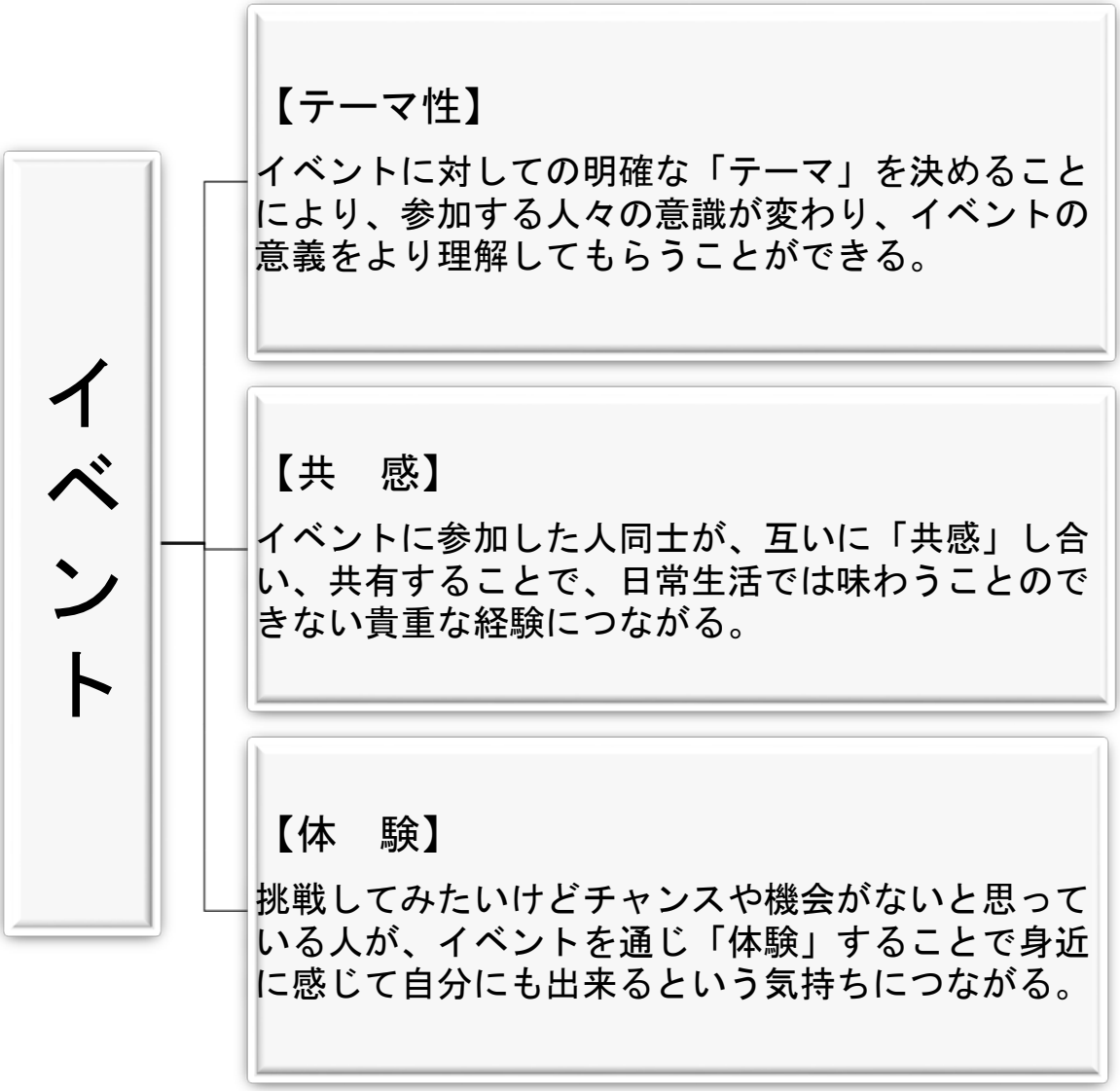
「水辺」には、目で見て感じる視覚、耳で聴く聴覚など人の五感を刺激する要素がたくさん詰まっており、日常生活の風景をおしゃれな空間に変える可能性を秘めている。

【刺激される五感】

①	**視覚**	水辺の風景を**見て**、心の安らぎを感じる。
②	**聴覚**	水辺に吹く風の音や、木々の音を**聴いて**、癒しを感じる。
③	**触覚**	水に**触れる**ことで、自然を感じる。
④	**味覚**	水辺を眺めながら、**味わって**、体の内側から幸せを感じる。
⑤	**嗅覚**	水辺を感じながら空気を**嗅いで**、季節のうつろいを感じる。

（３）魅力的なイベントに必要な要素

イベントの提案を考えていく上で、以下の図に示すように「テーマ性」「共感」「体験」の３つの要素をもつイベントは、魅力が高いと考える。



（４）イベントの提案

これまで述べたコンセプト及びイベントに必要な要素をふまえ、イベントの提案をする。

イベント名	**彩湖セラピー　～癒し時間のすすめ～**		
要　素	テーマ性　◎	共感　◎	体験　◎
イベント内容	戸田市の代表的な水辺空間である彩湖道満グリーンパークを生かした体験型イベント。ある時は、彩湖をバックにヨガ体験を行い、ランチは市内にあるオーガニックフードを扱うカフェとコラボした、ランチボックスをピクニック気分で味わう。またある時は、女性限定のサイクルイベントを開催し、普段なかなかチャレンジできないロードバイクの試乗会や、乗り方をレクチャーしてもらい、サイクリングを楽しんだあとは、自然の中で受けるアロマテラピーやリフレクソロジー体験。その体験を通じ、彩湖道満グリーンパークの魅力を感じてもらい、戸田市の良さを知ってもらう。		
対　象	幅広い世代の女性		
開催時期	季節ごとに合わせたテーマで開催（年４回程度）		
期待される効果	彩湖道満グリーンパークのロケーションを生かしたおしゃれなイベントを開催することにより、普段なかなか訪れる機会の少ない女性が、体験を通じて情報発信者となり、戸田市の魅力度アップにつながる。		

イベント名	**サンデーマルシェ**		
要　素	テーマ性　◎	共感　◎	体験　◎
イベント内容	戸田市は住民の平均年齢が若く、おしゃれや食に敏感な、ファミリー層も多い。子育て世代が親しみのある場所（例えばあいパル等）で、ハンドメイド雑貨やオーガニック食材をテーマにしたマルシェを開催する。		
対　象	すべての人（特にファミリー層）		
開催時期	月１回程度開催		
期待される効果	戸田市の公共空間を使用することにより、普段利用することが少ない世代も、施設に訪れるきっかけとなり、楽しむことによってシビックプライドにつながる。		

6.4　話題性のある情報を発信する「拠点」

（１） 方向性・必要性について

戸田市流のおしゃれの発信基地となる拠点をつくることは、市民にとって憩いの場となり、シビックプライドの醸成につながる重要なものだと考える。何をどこに作るべきなのかを、戸田市の代表的な水辺スポットの現状等を踏まえながら検討していく必要がある。

（２） 戸田市の水辺スポットの現状と提案

戸田ボートコース

大学の艇庫や合宿所が並び、またボートの練習をする大学生等の若い世代で活気があるが、カフェや店舗は一切なく、一般市民の憩いの場とは言い難い。

そこで、高台広場周辺にボートコースを眺めながら、コーヒーやお酒が楽しめるカフ

ェが併設されると市民の憩いの場としての利用度が高まるのではないかと考える。

彩湖道満グリーンパーク

休日には大勢の家族連れが訪れるスポットである。また、彩湖を利用したウインドサーフィンや、SUP 教室などにも利用されたり、彩湖の周りをマラソンやウォーキング、サイクリングを楽しむ人も多数見られる。しかし、彩湖周辺には、ひと休みできるカフェや店舗はなく、スポーツで訪れる人にとってはひと休みできるスポットがない。

そこで、サイクリストやランナー向けの施設を作り、サイクリストのための空気入れや、一息できるカフェ、またシャワー施設なども完備し、彩湖のスポーツ拠点として併設されると、彩湖道満グリーンパークの知名度アップにつながると考える。

さくら川遊歩道

彩湖道満グリーンパーク

市内の水辺スポットには、桜の並木があり、春には満開の桜を楽しむことができる。しかし、桜を見に来る人が楽しめるスポットや、立ち寄る店舗等はない。桜のシーズン以外は、なかなか集客を見込めないスポットでもあるため、常設の拠点づくりは難しいかもしれないが、期間限定の移動販売等なら需要はあると考える。